

令和4年度 小平市立小平第七小学校 学校評価報告書									
学校教育目標 本校及び地域社会の実態に基づき、「よく考える子」「いつも元気な子」「こころのやさしい子」の育成を目標に掲げ、その達成に努める。									
目指す学校像(ビジョン)									
【目指す学校像】 子どもも大人も笑顔と思いがいっぱいの学校									
【目指す児童・生徒像】 ◎よい考えいっぱい 他者と考えを深め合える子 ◎あいさついっぱい すずんで行動しようとする子 ◎思いやりいっぱい 相手の気持ちを考えられる子									
【目指す教員像】 ◎児童を心から慈しみ理解し、よさや個性を引き出し、伸ばす教職員 ◎自らの課題を認識し、日々研鑽に努めると共に、協働して磨き合う教職員									
◎地域を愛し、地域や保護者と共感し、積極的に対話しながら地域や保護者や地域の信頼に応える教職員									
前年度までの学校経営上の成果と課題									
(成果)①学習者用端末を含むICT機器の活用や「学習プロセス」を生かした授業などの継続的な取組を生かし、児童が自分の考えを確かなものにするなど学力向上につながる授業改善を行うことができた。									
②「特別の教科 道徳」の取組により、他者への思いやりについて深く考える児童の育成につながる事ができた。 ③コロナ禍においても可能な限り保護者・地域との連携を図り、教育活動を進めることができた。									
(課題)①児童の「書く力」育成に取り組み、更なる学力向上を目指す。 ②挨拶の習慣化を図る。 ③体力向上への意識を高める。 ④心の教育の更なる充実を図る。									
	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策		第2回評価		学校関係者評価 (○成果 ●課題)	成果・課題・次年度以降の対策
		取組評価	成果評価			取組評価	成果評価		
学力向上	「計算クエスト」「東京ベーシック・ドリル」等の実施やICT機器等を活用した分かりやすい授業を行うとともに、読書活動を推進する。	4	2	児童・保護者ともに、「学校で学習した内容を理解している」ことについて、肯定的な回答の割合は約9割であった。学習内容の確実な定着を図るための指導を行っている回答した教員は、9割を超えている。ICT機器を活用し、視覚的に分かりやすい授業を行っていることについては、97%の教員が肯定的な回答をしている。今後も、学習者用端末を活用しながら、更に指導を工夫していく。「すずんで読む」ことについては更なる声掛けが必要だと考える。		4	2	○教員は、ICT機器の活用とその指導方法の研究に積極的に取り組んでいる様子を見ることができた。 ○学習者用端末を補助教材として活用し、児童の発達段階に応じて工夫された授業が展開されていたことは大いに評価できる。 ○全国学力調査の結果などから、学校だけでなく、家庭との協力が必要である。 ●放課後子ども教室や七小支援ネットを活用し、復習や反復練習の場を増やすことも考えられる。	学習内容の理解については、9割弱の児童が肯定的な回答をした。第2回目のアンケートでは、保護者の「とても思う」回答率が11%上昇し、学習面に対する指導の成果を見ることができた。ICT機器の活用については、CSの方から教員がICT活用方法を工夫することにより、分かりやすい授業を展開し、児童が集中して授業を受けているとの評価を得て、保護者の評価は9割弱が肯定的な回答であった。読書活動については、依然として個人差がある。今後も児童に読書の習慣が身に付くよう、定期的に声掛けをして、司書ボランティアと連携し一層本に興味をもつことができるよう働きかけていく。
	地域の教育力を生かした授業を行うとともに、「学習プロセス」を生かし、学習者用端末を活用するなどしながら課題解決型の学習や交流学習に取り組む。	4	3	「学習プロセス」を活用した課題解決型の学習や交流学習に取り組むことについては、91%の教員が肯定的な回答をしている。「主体的・対話的で深い学び」の観点による授業改善が図られ、定着していることが分かる。学習者用端末を使うことで、コロナ禍であっても対話的な学習が可能になっている。「めあてをもって学習に取り組み、すずんで自分の考えを発言したり、友達の見解を聞いて確かめたりするようにしている」という設問に肯定的な回答をした児童は、79%であり、今後も、個別最適な学習の実現に向け、指導を工夫していく。		4	3	第2回の児童アンケートでは、「めあてをもって学習に取り組み、すずんで自分の考えを発言したり、友達の見解を聞いて確かめたりするようにしている」という設問に肯定的な回答をした児童が増えた。「学習プロセス」を活用した課題解決型の学習や交流学習に取り組む、主体的・対話的な授業を行っている」という設問に肯定的な回答をした教員は94%であった。1回目と比較して増加しており、児童の意識に反映されている。今後も、個別最適な学びと協働的な学びによる指導の在り方を模索していく。	
	児童の「書く力」の育成を通じて、「表現力」を高める指導の在り方を追究する。	4	2	今年度、校内研究の研究主題を「自分の思いや考えを言葉で表現する児童の育成～書く力を高める指導の工夫を通して～」とし、学年ごと児童の実態に合わせた手立てを工夫することで、児童の書く力の向上を図っている。「日記や作文、ワークシートや振り返りカードなどにすずんで自分の思いや考えを書くこととしている」という設問に肯定的な回答をした児童は79%であった。今後も児童の変容に合わせて手立てを見直しながら進め、児童の書くことへの意欲を喚起する。		4	3	校内研究で児童の「書く力」の育成に取り組んだことで、児童の表現力を伸ばすための手立ての工夫に取り組んだことに対する教員の肯定的な回答は、97%から100%となった。児童アンケートにおいては、「日記や作文、振り返りやワークシートなどに、すずんで自分の思いや考えを書くようにしている」の項目の肯定的な回答が増えた。校内研究の取組の成果として、文章を書くことへの抵抗が減ってきている。今後は、語彙力や相手に伝わる文章の工夫についても更に伸ばしていく。	
	いじめ防止アンケートを有効に活用して児童の実態を把握し、全校朝会等で人権意識の向上を図る。また、「特別の教科 道徳」をはじめ、教育活動を通じて思いやりの心の育成に取り組む。	4	3	児童の83%が「困ったことがあったら相談できる人がある」という設問に肯定的な回答をしている。ふれあい月間の取組や目黒からの丁寧な聞き取りにより、児童の思いを見逃さないよう努めている。今後も、早期発見・解決に努め、組織的な対応を行う。保護者に対しても、学校の取組を保護者会や便りを通じて知らせていく。また、自分と友達との違いを理解して関わることを意識できている児童が89%いる。今後も、互いを尊重し合うことの大切さを伝えていく。		4	3	○SNSを通じた問題を想定し、相手の立場に立って考え行動する能力を身に付けることが求められる。「特別の教科 道徳」の取組は重要であり、児童もねらいに沿って考えることができていた。 ○学校行事において、教員の指導に児童が答えて真剣に取り組む姿が見られた。 ●あいさつ運動を再開させ、挨拶の意味や人と人とのつながりの大切さを感じさせることができるように。	児童アンケートの「困ったことがあったら相談できる人がある」という設問に肯定的な回答をしている児童の割合が、83%から88%に増加した。今後も何でも相談できる関係を築き、カウンセリングやメンタリングなどをもって児童と接するとともに、引き続きいじめの早期発見・解決に努め、組織的な対応を行っていく。また、思いやりの心の育成についての設問については、約9割の児童が肯定的な回答をしている。今後も、相手の立場に立って多様な認め合うことができるよう、「特別の教科 道徳」を中心に教育活動全体を通じて心の教育の充実を努めている。
健全育成（いじめ防止）	あいさつ運動を定期的に行うとともに、七小スタンダードを基に、授業等の規律の定着に取り組む。また、行事や諸作品募集等に積極的にチャレンジする機運を醸成する。	4	3	児童の88%が「先生や友達にすずんであいさつをしている」という設問に肯定的な回答をしている。日常の様々な場面ですぐに自然にあいさつの言葉を聞かせることができるようになっている。「七小スタンダード」については、肯定的な回答をした児童が87%、チャレンジすることについては、今年度がほぼ減少する傾向にあるものの、81%の児童が肯定的な回答をしている。後者については、コロナ禍であるが実施可能なものが増えてきているので、児童が更に積極的にチャレンジすることができるよう、機運の醸成に努めていく。		3	3	「先生や友達に自分からあいさつしている」という設問について、1・2回目ともに9割近くの児童が肯定的な回答をしており、挨拶の習慣が定着してきている。「七小スタンダード」については、肯定的な回答をした児童が増えた。チャレンジすることについては、2回目のアンケートの結果が10%程減っている。大きな行事に限らず、日常の学校生活の様々な場面ですずんで取り組む気持ちを育てていくようにする。	
	外遊びの励行など、体育的活動を充実させることで、運動の日常化を図る。	3	2	休み時間の外遊びについて、肯定的な回答をした児童は73%、教員は88%である。昨年度の同時期と比較して、教員の割合は、17%増加している。保護者の「お子様は外遊びや運動を通して体力を付けてきている」という設問の肯定的な回答の割合は、82%でコロナ禍であっても少しずつ運動する機会が増えていると感じていることが分かる。今後も、感染症対策を施した上で、児童の体力向上を図るよう努めていく。		4	2	○コロナ禍であっても、運動会や持久走記録会などを中止せずに行ったことはよかった。 ○運動会では、取り組み時間は限られていたが、児童全員が一つの目標に向かい協力し合って取り組むことができたことによる学習効果は高かった。 ●コロナ禍で家の周辺で遊ぶ児童が減ったように思う。児童が様々な運動を経験し、日常化が図られるように、取組の手伝いができるようにする。	休み時間の外遊びについて、教員の肯定的な回答が増加した。今後は、休み時間に限らず、運動会、持久走記録会、なわとびチャレンジなどの機会を、児童の体力向上に向けた取組と捉え、更に意識して指導を行っていく。
	養護教諭、栄養士、地域、企業、関係機関等と連携した健康教育・食育を充実させ、健康の保持増進について指導する。	4	2	保健の授業や保健だより、栄養士による食育の授業や昼の給食に関する校内放送などを通じ、児童は、健康や食事に関する関心や意識を高めている。健康の保持増進に関わる設問の肯定的回答率は、児童が80%、保護者が77%となっている。引き続き、学校と家庭が連携して規則正しい生活を送ることができるよう協力していく。		4	2	「寝る時間や食事の仕方に気を付けている」という設問に肯定的な回答をした児童は、1回目より増加して82%であった。一方、「お子様は寝る時間や食事の仕方に気を付けている」という設問に肯定的な回答をした保護者は、若干低下した。児童と保護者の認識に差があり、それを埋めていく必要があると考える。学校では、保健指導や食育指導を継続的にを行い、コロナ禍で制限していた外部との連携も進めていく。学校と家庭が協力して児童の基本的な生活習慣を維持し、食に関する意識を一層高めていくようにする。	
	特別支援教育の視点で落ち着いた学習環境の整備や分かりやすい授業づくりを行う。また、月1回ミニ研修を行い特別支援教育の指導方法・内容への理解を深める。	4	2	特別支援教育については、校内で計画的に研修を行っている。その学びを生かし、特別支援教室「はなみずき」に連携しながら、児童の実態に合った指導をすることが特に、肯定的な回答をした教員が97%となっていた。また、ユニバーサルデザインによる学習環境づくりも継続している。一方、保護者の「学校は一人一人の状況に応じた指導をしている」という設問に対する肯定的回答の割合は、78%となっており、保護者会等と具体的に伝える機会を工夫していく必要がある。		4	3	○特別支援教室の授業では、児童一人一人に対する接し方や指導方法の工夫が見られ、分かりやすい授業が行われていた。 ●コロナ禍もあるが、幼稚園・保育園・中学校との連携の状況の情報を可能な範囲で知りたい。	特別支援教室「はなみずき」の教員による研修や教員間の連携した指導により児童に対する支援体制を充実させることができる。保護者アンケートの「学校は、一人一人の状況に応じた指導をしている」の設問の肯定的な回答率は、増加した。今後も特別支援教室の教員と連携し、特別支援の視点を生かした指導を工夫したり、全ての児童にとって学びやすい環境を整えたりしていく。
特別支援教育	各関係保・保、中学校と連携し、適切な就学及び小学校6年間だけで終わらない継続した教育を行う。	3	2	保護者の「学校は、地域を幼稚園・保育園・中学校と連携し、継続した教育を行っている」という設問に対する肯定的な回答が74%であった「小・中連携」において、六中学校全体で児童・生徒の「書く力」の向上を図っていること、幼稚園・保育園と小学校、第6学年と中学校との引き続きの連携に向けた取組について、保護者会や便り等へ紹介するなど、本校の取組を発信していく必要がある。		2	2	今年度の小・中連携では、学力向上に重点を置き、児童・生徒の「書く力」の育成を目指した。各教科で「振り返り」を行うことで、書く量や質が高まってきたことが成果である。今後も児童と取り組む必要がある。保護者アンケートでは、「学校は、地域の幼稚園・保育園・中学校と連携し、継続した教育を行っている」という設問に対して78%の保護者が肯定的な回答をしている。入学前の保・幼・中との連携や「小1アプレム」「中1キックアップ」に対する「ようこそ先輩」の取組などは毎年行っている。こうした取組の実施についてCS委員や保護者にも発信していく。	
	学習支援ボランティアの充実を図り、地域人材や関係機関の活用を積極的にに行い、連携したよりよい教育活動を展開する。	4	3	昨年度は、コロナ禍で地域人材の活用が十分でなかったため、教員による評価数値は1であったが、今回は4に回復した。「地域の教育力を生かし、し、学校支援ボランティアなど人材活用を進めている」という設問について、89%の保護者が肯定的な回答をしている。今後も、感染症拡大防止に努めながら、実現可能な方法を探り、児童の資質・能力の定着を図っていく。		4	3	○様々な行事において、保護者・地域の参加が多く、連携ができている。 ○10月12日に渡るCS遠隔講座を開催できた。今後も定期的に開催したい。 ●放課後子ども教室や「七小支援ネット」の活動を普及する方法が必要である。	今年度は、七小支援ネットを活用した授業を展開することができた。また、60周年行事に向けても協力いただき、校内環境の整備など、協働して取り組むことができた。一方で、放課後子ども教室「まなびひろば」や七小支援ネットと連携した学習ボランティアと教員の連携については、再度強固なものにできるように働きかけていき、学校・家庭・地域が一体となって児童の学力を支えていく。
	教育計画の電子化及び職員会議等におけるペーパーレス化を行う。また、会議の精査や通知文などの精選、アンケート調査における学習者用端末の活用など方法の改善を図る。	3	2	C4th等の活用により、現状で可能なペーパーレス化を図ることは、定着している。今年度、学校行事の内容や会議の精査、通知文の精選、保護者アンケート等へのICT機器活用などを図っている。まだ取組状況に差はあるものの、今後浸透していくよう努める。		3	2	特記事項無し	各行事や校務の内容、会議の精査、通知文の精選などを通じて学校としての働き方改革は進んでいる。学校としての取組が個人の働き方に反映できている。今後も、よりよい業務の在り方を検討し、進めていく。
	働き方改革								